

# わかば

2020. 12. 12  
(令和2年) 第20-32号

文責 校長 保谷 力

ホームページ <http://www.shokookai.org/gakkou.htm> 毎週火曜日更新

教育目標 「帰国後、日本の教育に円滑に適應できるよう、日本の学校における学習指導要領に沿った国語、算数(数学)の学力の維持、併せて生活・生徒指導を行う。」

重点目標 一人一人の笑顔輝く学校づくり～期待登校・満足下校～

## お疲れ様！教育委員の皆さん

校長 保谷 力

先日、第12回教育委員会がオンラインで開催されました。思い起こせば4月の突然のコロナ騒動の中、渡米することができず、日本国内より定例の教育委員会にオンラインで初参加しました。当初は日本人学校の方向性を検討するために、教育委員会の皆さんと知恵を絞りながら、その対策に明け暮れる毎日だったように記憶しています。あれから9ヵ月、「子供たちの学びを止めない！」を合言葉に様々な未知の体験を一つ一つ克服しながら今日に至りました。

何といたっても先生方の柔軟な対応と献身的な取り組みには頭が下がる思いです。子供たちも少しずつオンライン授業に慣れ、学級を一つのコミュニティの場として、楽しみにしているという話も聞こえてきます。行動が制限され、行き場のない子供たちに深い愛情をもって接して頂いた保護者の皆様には、このような状況にもかかわらず、本校の学校運営にご支援、ご協力をいただきましたこと、改めて感謝申し上げます。

さて、学年末に向けての進学・進級について考える時期となりました。この対応については、先日の教育委員会の中でも話し合いがもたれました。こうした状況下では、例年のような進学・進級のための適正な審査が難しいため、今後の対応について引き続き継続審議となりました。しかし、大切なことは、どの学年に進学・進級しても、「その学年に応じた適正な学力が備わっていること」が条件となります。学校は前年度の学習が理解できているという前提で、新しい学習が始まります。進学・進級審査がどのような形になるのか分かりませんが、現学年の学習を見直し、何ができて何ができていないかをしっかり把握しておくことが大切であると考えます。

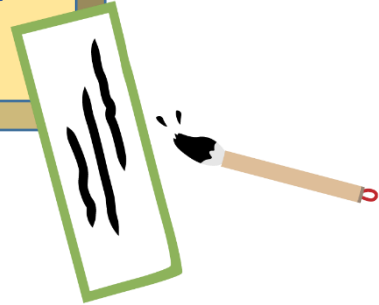
右の写真は、先日行われた第12回教育委員会の様子です。画面を通しての会議ですが、苦労の多かったこの一年を振り返ることができました。



オンラインによる教育委員会



## 第40回海外教育子女教育振興財団 入選作品のご紹介



### 【短歌の部 佳作】

「日本行き？」 空の飛行機に問いかける もしそうならば私を乗せて  
太田 野乃 (中学1年)

### 【俳句の部 佳作】

ベリーの木 つみとる手から ひかりさす 越野 壱音 (小学5年)  
つばめの子 巣から顔出し えさを待つ 太田 野乃 (中学1年)



### 【作文の部 優秀賞】

「百人の神様」

中学部一年 太田 野乃

私には百人の神様がいる。その百人は、和歌の大家、藤原定家が、何万もある和歌の中から、選りすぐりの百選をまとめた「小倉百人一首」に登場する歌人百人だ。

私は、好きなアニメに、百人一首を使って行う「競技かるた」のシーンがあった事がきっかけで、百人一首と競技かるたが大好きになった。上の句が読まれた瞬間、目にもとまらぬ速さで下の句が書かれた札を取っていく選手達が、すごくカッコいいと思った。半年後くらいには、父の仕事の都合でアメリカに引っ越すことが決まっていたが、「半年だけでも」と思い、競技かるたを習い始めた。毎週日曜日、四時間だけだったが、とても楽しかった。

習い始めてから、学校の登下校時間や休み時間は、いつも百人一首の事ばかり考えていた。家に帰ってから、宿題を終えたら、すぐに百人一首の札を全部畳に並べて眺めた。毎日それを繰り返している、あつという間に百首すべて覚えた。

全国トップレベルの人は、試合で袴を着るが、その他はみんなジャージの長ズボンなどをはいている。練習中もそうだ。だから、ひざの部分は、畳と布がこすれて、すぐに破れてしまう。足の甲もそう。裸足でやるので、畳とこすれるとすごく痛くて、すぐに赤くなってしまふ。相手の手や札と、変なふうにながぶつかることが多く、一回だけ突き指をしまったことがある。

三か月後くらいには、大会にも出場した。結果は、全試合負け。とても悔しかった。だけど、「自分と同じように、かるたが大好きな人がこんなにたくさんいるんだ」と、嬉しい気持ちになった。

そして、アメリカに行く三日前に、最後のかるたの練習に行った。先生が、ちよつとしたパーティーを開いてくれた。その時に食べたプリンがとてもおいしかったのを今でも覚えている。帰りのあいさつをする時に、先生が、

「野乃ちゃん、これからもかるた続けてね。」と言ってくれた。そして、大会などで使われる、特別な札をプレゼントしてくれた。その札は、競技かるた用に少し反っていて、私が書店で購入した、百人一首セットのようなものの札よりも分厚く、とても立派なものだった。私はすごく嬉しかった。その札がつぶれないように、スーツケースの上の方にそっと入れて、大切にアメリカに持ってきた。

アメリカに来て、かるたをやり続けようと思った。しかし、そうはいかなかった。

家に畳が無く、仕方がないのでカーペットで練習した。家族に競技かるたができる人がいないので、自分で相手の分の札も並べ、一人二役をした。いつもかるたをしていた時に感じていた、足の甲と畳がこすれた時の痛みや、相手から伝わる熱気のようなものが全く無かった。少しさびしかった。また、平日は現地校、土曜日は補習校、日曜日は一週間の疲れがドツと出て休んでばかり。という生活が何カ月も続き、かるたをするための時間が取れなかった。あまりにも長い時間、かるたをしなかったため、先生がくれた札の入っている箱は、ほこりをかぶっていた。

そして、とうとう、かるたをやらなくなった。そのまま一年が過ぎた。私は、アメリカの中学校に入学した。他の小学校から来た人や違う町から来た人がたくさんいて、英語があまり話せない私は、友達全然出来なかった。

だけど、私に友達を作るチャンスが来た。「英語の歌を覚えたい」という理由で、私は、選択科目に合唱を選んだ。そこで、日本語の歌をコンサートで歌うことになったのだ。しかも、その歌の歌詞は、百人一首の百首目、順徳院が詠んだ

「百敷や古き軒端のしのぶにもなおあまりある昔なりけり」という歌だった。

私は、とても驚いた。アメリカの現地校で日本語の歌を歌うことなんて無いと思ってたし、それが大好きな百人一首の和歌の一つだなんて、ほんとうに夢みたいだ。

私は、つたない英語で、発音の仕方や、単語の意味をクラスの

みんな一生懸命聞いてくれた。それをきっかけに、話したことの無い人と仲良くなれた。すごく嬉しかったし、毎日学校に行くのが楽しみになった。

それと同時に、私は、百人一首などの和歌、短歌は、立派な「歌」だということを再確認した。それも、日本だけでなく、アメリカでも受け入れてもらえる素晴らしい歌なのだということを。私は百人一首を覚えていて本当に良かったと思った。

百人一首は、何百年も前の時代を生きていた人達が、現代の私達に残してくれた、最高の歌だ。彼らが、何をどのように思い、どのように感じたのが、たったの三十一文字で分かる。そして、そのほとんどが今の私たちが共感できることばかりだ。何百年も前の人も、誰かと出会い、嬉しく喜んだり、四季折々の風景を美しいと思ったり、人生は大変だなあと考えたりしていたのだ。人々の考えることは、いつの時代もあまり変わらないのだ。すごく親近感がわいてくる。

私は、自分が日本語を理解できる人で良かったと思った。じゃないと、百人一首を理解できないと思っていたから。だけど、アメリカに来てから、その考えは少し変わった。日本人だけでなく、世界中の人々も、少しくわしく背景などを知れば、百人一首の世界を楽しめるということを知った。それを可能にしたのは、当時はもちろん、現代の人々をも魅了し続けることの出来る歌を詠んだ百人の神様と、それを伝え続けた我々日本人だ。

百人一首は、これからずっと、人々を感動させることができると私は思う。

